

朱熹『小学』編纂考

——劉清之小学書からの改修に關して——

松野 敏之

序

朱熹が重視した「敬」は、大学・小学を貫く工夫であり、聖人であつてもただ「敬」だけであると説くに至る。大学に關しては、淳熙四年（一一七七）、『大学章句』を編纂。臨終まで改編を繰り返したとはいえ、大学における為学をひとまず明らかにしたわけである。そして淳熙一四年（一一八七）、小学に關する良書の無いことを憂えて『小学』を編纂した。

小学書編纂に劉清之が関与していることは周知の通りであるが、その関わり方に対する見解は定まらない。『四庫提要』が「此の書を編類するは、実に子澄（劉清之）に託す」と記して、『小学』の主たる編纂者を劉清之（字、子澄）とする見解がある一方で、陳榮捷は「上に引く『答劉子澄書』数通を觀れば、則ち小学の動機・項目・義例は、皆朱子に属す」（『朱子新探索』四一九頁）と説いて、劉清之

は朱熹の意向に従つて、ただ『小学』に収める言行を蒐集したに過ぎないとする見解もある。ところが、朱熹「答蔡季通」(『朱子文集』続集卷二)には、劉清之が編纂した「(小学)鄂州本」と朱熹が編纂した「武夷精舍小学之書」とが見える。つまり、小学書は二本あったのであり、検討すべきは、この二本の小学書の異同と、朱熹がどのような意図に基づいて劉清之小学書(鄂州本)を改修したかであろう。本稿では、朱熹小学書と劉清之小学書の違いを、その編纂改修に注目した上で、朱熹の小学に関する見解がどのように小学書改修に反映されたかを検討する。そのためには、やや迂遠ながら、従来言及の少ない劉清之に関する検討と、朱熹が劉清之小学書に加えた改修について明確にすることから始めたい。

一

小学書編纂において重要な役割を果たした劉清之(一一三三—一一八九)は、字は子澄、吉州廬陵の人。劉氏一族は、五世の祖劉式(九四八—九九七)が繁栄の基を築き、劉敞(一〇一九—一〇六八)・劉攽(一〇二三—一〇八九)等を輩出した名族である。劉式の藏書数千巻は「墨莊」の名で知られ、代々子孫に享受されてきたが、宋室南渡の混乱の際にその藏書は散逸。紹興年間に入り、再び父劉潞(一一〇九—一一五九)・兄劉靖之(一一二八—一一七八)と劉清之が協力して「墨莊」を再建。父子共に、書籍蒐集に意を注いだ。

劉清之の著作は、『宋史』卷四三七・本伝に、『曾子』内外雜篇、『訓蒙新書』、『訓蒙外書』、『戒子通錄』、『墨莊總錄』、『祭儀』、『時令書』、『続說苑』、『農書』が、『宋史』芸文志に、『衡州図経』三卷、『劉清之文集』二十三卷が見える。ただ、朱熹の同調者と言われるごとく、学説における特殊性を示さなかったことと、門人子孫に有力者を得なかったことにより、殆どどの著作は散逸。現在閲覧し得る著作としては、『永樂大典』より『四庫全書』に再編収録された『戒子通錄』のみである。また成書されたかどうか定かではないが、『朱子語類』には劉清之が『続近思錄』を編纂していたことが見える。

劉清之が進士に及第したのは二五歳、紹興二七年（一一五七）。朱熹に初めてまみえたのは、隆興元年（一一六三）、博学宏詞科に応じようとした時である。その出会いは、彼の学問に対する姿勢を変えるものであり、『宋史』本伝は「朱熹に見ゆるに及び、尽く習ふ所を取りて之を焚き、慨然として義理の学に志す」と記す。以来、往來を重ねるようになり、朱熹も五言絶句「墨莊五詠」（『朱子文集』卷四）を送る等、劉清之を評価していた。また、「呂伯恭・張栻皆神交心契す」（『宋史』本伝）と、呂祖謙（一一三七—一一八一）・張栻（一一三三—一一八〇）とも親しく交遊した。彼等の交流は、乾道四、五年頃より盛んになり、以來書簡のやりとりだけでなく、しばしば往來を重ね、陸氏との鵝湖の会にも参会している。呂祖謙の疾病に際しては、「晦翁我（劉清之）に公（呂祖謙）の疾少間するを告げ、明年春同に此を償はんことを期す」（『東萊集』附録卷二・劉清之「祭文」）と劉清之と朱熹

は共に見舞いに行く約束をしていたが、実現する前に呂祖謙が亡くなってしまふ。淳熙七・八年の張栻・呂祖謙の相繼ぐ死は、朱熹をして「二友（張栻・呂祖謙）云に亡く、……今乃ち深く吾が子澄に望有り」（答劉子澄七）と述べさせている。小学書編纂の話題が朱熹・劉清之の間で具体化したのは、この二友の死後であり、共に講学に意を注ぎ出す時期である。

朱熹は、自身の編纂書である『小学』を「武夷精舍小学之書」と言うのに対し、劉清之の小学書は「鄂州本」と言った。それは劉清之の小学書が鄂州において刊行したからである。劉清之が鄂州通判であつた時期を示す確たる資料は無いが、およその想定は可能である。劉清之が鄂州通判に任命されたのは、淳熙三年（一一七六）二月。龔茂良・周必大の推薦により、孝宗の召待に応じて朝廷で奏事を行ったことに因る。しかし、同年に義母裴氏が、淳熙五年（一一七八）に兄劉靖之が相繼いで亡くなり、久しく官には就かなかつた。そのため、実際に鄂州通判の任にあつたのは、朱熹「鄂州社稷壇記」（『朱子文集』卷七九）が書かれた淳熙一年（一一八四）正月十四日の前後になる。次の任官である知衡州には、淳熙三年（一一八六）四月に着任しているので（『衡州府志』）、鄂州での任はそれより以前となる。その上で彭龜年（一一四二—一二〇六）が劉清之に贈つた「太常寺主簿 劉清之が鄂州通判に赴くのに別れるの詩」（原注）壬寅（淳熙九年・一一八二）夏」（別劉寺簿子澄赴岳州倅「壬寅夏」詩）」（『止堂集』卷一六）に従えば、淳熙九年夏か秋頃には鄂州に着任したと推測し得る。鄂州通判として三年を経たとすれば、先の資料と比しても無理の無い任期であろう。すなわち、劉清之が鄂州の地にあつたのは、淳熙九年夏秋頃より淳熙一二年頃までであり、「鄂州本」と言われた劉清之の小学書は、この間の刊

行であると推測し得る。

二

朱熹が「小学書題」を著したのは、淳熙一四年（一一八七）三月一日。『小学』の成書もこの前後である。その篇目は内外篇六篇、内篇には立教・明倫・敬身・稽古の四篇を、外篇には嘉言・善行の二篇を収める。内篇は経書および先秦の文献から、外篇は漢代以降の文献から小学に関する言行を収録。立教・明倫・敬身は、行うべき「事」の規範を示し、稽古・嘉言・善行は古今の小学に関する言行を収録している。

小学書の編纂改修については、朱熹が劉清之に与えた書簡に見えるのがほぼ全てである。『朱子文集』（卷三五、別集卷三）に収める劉清之への書簡は二〇通。うち小学書編纂について言及のあるものは、卷三五に収める「答劉子澄」七・十一・十二・十四の四通である。朱熹と劉清之がいつから小学書編纂を企図するようになったかは明確にし得ないが、小学書の話題が初めて見えるのは、淳熙一〇年（一一八三）七月に著された「答劉子澄」七になる。

『小学書』は整理し終ったでしょうか。早々に整理して、便人を探して寄こして下さったならば、幸いです。先日差し上げましたのは、ただこのように編纂しようと考えたことについてです。いま子細に考えるならば、あなたから頂いた構想の良さには及びません。ただ現在編纂している対象は、

全て法制の語です。もし「嘉言」「善行」の二類を付け足し、その二類の中についてそれぞれ經史子集の言を併せて採り入れようとするならば、その説は完備されたものとなるでしょう。

小學書曾爲整頓否。幸早爲之、尋便見寄、幸幸。昨來奉報、只欲如此間所編者。今細思之、不若來教規模之善。但今所編、皆法制之語。若欲更添嘉言善行兩類、即兩類之中自須各兼取經史子集之言、其說乃備。

この時、朱熹自身の小學書に関する編纂方針は劉清之に送っており、劉清之の方でも編纂方針か、あるいは編纂途中の小學書を朱熹に送っていた。「法制の語」は、『礼記』などに存する規範であり、劉清之が編纂していた小學書は小學としてふみ行うべき「事」を、主として集めていたのである。そのような劉清之の小學書に対して朱熹が提示したのは、「嘉言」「善行」二篇を増して、經史子集より小學書にふさわしい古人の言行を併せて収録したならば、さらによくなるだろうということであった。

この後、淳熙十一年（一一八四）の書簡「答劉子澄」九・十では、小學書を早めに送るように劉清之に催促するだけであったが、翌淳熙十二年（一一八五）二月頃の書簡「与劉子澄」十一では劉清之の小學書を受け取り、それに朱熹自身が手を加えたことを述べる。

（劉清之が）刊刻した書はどれも裨益あるものですが、ただ『小学』は残念なことに忽卒であり、また潤色を蒙っておりません。最近、略々改修しました。

所刻之書皆有益、但小學惜乎太遽、又不蒙潤色耳。近略修改。

既述の通り、劉清之が鄂州に赴任していたのは、淳熙九年（一一八二）夏秋頃から淳熙十二年（一一八

五）頃であつた。それ故、この淳熙一二年春には朱熹の手元に届いていた劉清之小学書は、蔡元定の書簡（『朱子文集』続集卷二）に見える「鄂州本」であると考え得る。朱熹が小学書を催促していたのが淳熙一一年春以降であり、淳熙一二年二月には手元に届いていることより推測すれば、劉清之が小学書（鄂州本）を刊行し、朱熹に送つたのは淳熙一一年秋冬頃であろう。しかし、その劉清之小学書（鄂州本）は、朱熹の意に沿うものではなく、ひとまず暫定的改修が加えられた。それから半年後、淳熙一二年七月の書簡（与劉子澄十二）では、

今年、諸書はすべて一通り改修し、旧稿と比較すると全て簡易で滞りがないと思います。残念なのは（あなたに）呈示して相談できなかったことです。『小学』は改修して、……それで全部で六篇に定めました。

諸書今歳都修得一過、比舊儘覺簡易條暢矣、恨不得呈示商量也。小學見此修改、……凡定著六篇。と、小学書に更に改修を加え、現行の篇目と同じ内外篇六篇としたことを報告している。朱熹『小学』の大枠はこの淳熙一二年七月に定まったのであり、その改修に劉清之は加わっていない。これ以降、「小学書題」を著す淳熙一四年三月までにどの丁度の改修が加えられたか定かではないが、最終稿は武夷精舍にて刊行。それが蔡元定書簡に見える「武夷精舍小学之書」である。

以上の朱熹と劉清之の小学書編纂に関するやりとりをまとめれば次のようになる。淳熙一〇年七月、朱熹・劉清之は、小学書に関する編纂方針を共に示し合い、劉清之は実際に編纂に着手。淳熙一一年秋冬頃、劉清之は小学書（鄂州本）を刊行し、朱熹に送付。朱熹の方では、淳熙一二年春の書簡で劉清之

小学書に暫定的改修を加え、同年七月までには更に大々的な改修を行なつて、現行本の篇目と同じ内外篇六篇とした。實際の編纂改修に関しては、劉清之小学書には朱熹は関与せず、また淳熙一二年に朱熹が行なつた一連の改修には劉清之は関与していない。つまり、「鄂州本」は劉清之が編纂した小学書であり、「武夷精舍小学之書」は「鄂州本」を朱熹が改修した書である。

三

朱熹は劉清之小学書（鄂州本）に飽き足らずに改修を加え、武夷精舍本を刊行したが、それはいかなる見解に基づいて改修したか。朱熹が加えた改修については、劉清之への書簡に見える。

淳熙一一年秋冬頃に劉清之小学書（鄂州本）を受け取つた朱熹は、早々に暫定的改修を加えた。

最近、略々改修し、各章全ての冒頭に、（その章の）書名か或いは発言者の名・字を加え、さらに題詞韻語（小学題辭）を附して、童子の学習に便利であろうことを願つております。今は軽率ながら一通り収録したのですが、後日、暇いとまが出来ましたら、最終的には故事で欠落しているものを補足しようと考えております。

近略修改、每章之首加以本書或本人名字、又別爲題詞韻語、庶便童習。今謾録去一觀、他日有暇、終望爲補故事之缺也。

（『朱子文集』卷三五・与劉子澄十一）

淳熙一二年春の書簡である。劉清之小学書には、書名・人名の明示が無く、古今の小学に関する故事も

朱熹から見れば少なかったのであろう。先ずは各章の冒頭に書名か人名・字^{あざな}を明記し、題辞（題詞韻語）を加えて、童子の学習の便をはかった。「題詞韻語」は、現行本朱熹『小学』に見える「小学題辞」のこと。教育の必要性和小学書編纂意図を述べた一句四字、五十六句の韻文をいう。その後、さらに暇^{いとが}が出来れば、故事を補足しようと望んでいる。事実、同年夏頃には着手しており、淳熙一二年七月九日の書簡（与劉子澄十二）で、劉清之にそのことを報告している。

『小学』は改修して、古今の故事を増補し、首篇（小学題辞）を書尾にまわし、初学者達にとって巻頭に受用があるようにし、末巻に周子・程子・張子等が人に教えた大略と郷約雜儀の類を増補して、それを分割して下篇としました。それで全部で六篇に決めました。

小學見此修改、益以古今故事、移首篇於書尾、使初學開卷便有受用、而末卷益以周程張子教人大略及郷約雜儀之類、別爲下篇、凡定著六篇。

書簡でいう「古今の故事」は、『朱子大全割疑』は「稽古篇」であるとするが、稽古・嘉言・善行に亘って増補した故事と考えるべきであらう。「首篇」は、春に附した「題辞（題詞韻語）」をいう。現行本『小学』ではこの時の編纂前と同じく巻頭に位置しているが、^明葉盛（一四二〇—一四七四）「晦庵小学定本」（『水東日記』卷一）に、

謹んで考えるに、ここである「首篇」とは、今の題した数語である。「末卷下篇」とは、今の外篇の嘉言・善行の二篇のことである。今、北京国子監本の小学書板を觀てみたところ、元至正十三年（一三五三）に重刻した元統癸酉（一三三三）燕山嘉氏本には、祭酒王思誠・監丞危素・助教熊

太古等の題識がある。朱晦庵が題したものは、卷末にあり、その目には「朱文公題小学書後」とある。題辭が卷末にあるとは、このことである。

嘗竊以爲所謂首篇者、即今所題數語。所謂末卷下篇、即今外篇嘉言善行二篇是已。今觀北京國子監小學書板、元至正十三年重刻元統癸酉燕山嘉氏本、有祭酒王思誠・監丞危素・助教熊太古等題識。其晦庵所題、乃在卷末、目曰朱文公題小學書後、而題辭則在卷端、是矣。

とあり、元統癸酉（一三三三）の燕山嘉氏本は、朱熹が述べているとおり「題辭」を卷末に附していたことを記録する。全体の篇目は、劉清之小学書が朱熹『小学』の内篇に相当する一篇のみであつたのに對し、朱熹は周敦頤・程顥・程頤・張載等の言行や、『呂氏鄉約』『呂氏童蒙訓』等を増補することによつて内外二篇としている。ただ、増補した宋儒の言行においても、程顥・程頤の言行を収録することに関しては、朱熹と劉清之に違いがあつたようである。小学書編纂に着手した当初、劉清之が程子の言行を収録することを避けていたことを、朱熹は「答劉子澄」七で以下のように説く。

あなたの議論には、程子を主張することを避けようとする疑いがありますが、程子からすればどうして我々が言挙げする必要があるでしょうか。しかし、立言・垂訓は、久遠に関する事ですから、どうして程子を避けたりできませんようか。詳細なことは『近思錄』に著わされているとはいつても、彼の一言半句まで、灼然として親切でありますから、後学者達に早い段階から程子の言説を聞かせて最初から心に入らせておかないわけにはいきませんし、もとよりこの書の妨げとはなりません。もし世俗に従い、凡庸な人に愛してもらおうと望むだけでしたら「符誦書城南」一篇で事は足りる

でしょう。どうしてわざわざあなたに拮据の功を煩わせる必要があるのでしょうか。

來喻又有避主張程氏之嫌、程氏何待吾輩主張。然立言垂訓、事關久遠、亦豈當避此嫌耶。其詳雖已見於近思、然其一言半句、灼然親切、不可不使後學早聞而先入者、自不妨特見於此書也。若只欲其合於世俗、而使庸人愛之、則符讀書城南一篇足矣、何事勞吾人拮据之功哉。

劉清之が小学書編纂に實際に着手したのは、淳熙一〇年。いわゆる「慶元偽学の禁」へと向う、道学を排斥しようとする情勢にあった。そのために劉清之は程子への言及を避けたのであろうが、そのような世情を配慮すべきではないというのが、朱熹の主張である。それは、小学書に収録する言行は、内容の適宜さに拠るべきであるとの主張でもあろう。

朱熹自身が述べた劉清之小学書の改修点を要するに、各章の冒頭に書名や名・字を附したこと、卷末（現行本は卷頭）に題辞を附したこと、小学にふさわしい古今の故事、ことに宋代の周子・程子・張子等の言行や郷約の類を大幅に増補したことである。また収録する言行の選択は、劉清之が「法制の語」を主として編纂していたのに対し、朱熹はそれに加えて程子を含めた「古今の故事」を大幅に増補することを望んでいる。

以上は、収録すべき言行の選択と篇目の変遷を主とした編纂過程である。検討する材料に乏しいものの、朱熹と劉清之とは、言行・故事の選択の仕方だけでなく、話題の抜粋収録の仕方にも差異があったのではないかと考え得る。朱熹が改修を要した劉清之小学書について、検討を試みたい。

四

現在まとまって閲覧し得る劉清之の著作としては、『戒子通録』が遺るのみである。『戒子通録』は、書名が示す通り、子弟を戒めた優れた語を、古今の書籍から博搜収録した書である。また実際に文章を見ることは適わないが、劉清之『曾子』内外雜篇は、朱熹の跋文によつて、おおよその内容がわかる。

右は『曾子書』七篇。内篇一篇、外篇三篇、雜篇三篇。吾が友清江の劉清之子澄が集録したものである。……世に伝えられる曾子の書というものは、ただ『大戴礼記』にある十篇だけを採り上げて曾子の書としている。そこに見える曾子の言語や雰囲気は、『論語』『孟子』『礼記』『檀弓篇』等に収められているものと比べれば遠く隔たっている。劉清之はこの状況を憂えて、そこでこの『曾子』を編輯し、学ぶ者に伝えようとした。

右曾子書七篇。其内篇一、外篇・雜篇各三、吾友清江劉清之子澄所集録也。……世傳曾子書者、乃獨取大戴禮之十篇以充之、其言語氣象、視論孟檀弓等篇所載相去遠甚。子澄蓋病其然、因輯此書、以傳學者。

（『朱子文集』卷八一・書劉子澄所編曾子後）

『曾子』跋文の執筆年は淳熙八年（一一八一）九月、朱熹が「小学書題」を著す六年前である。本跋文によれば、劉清之が編纂した『曾子』とは、『大戴礼記』のみならず『論語』『孟子』『礼記』『檀弓篇』に見える曾子の言行録を収集編纂して、一書にまとめたものであることがわかる。曾子の言行を内外雜

篇七篇の分量にまで収集していることより、劉清之の博搜性が窺える。それは小学書編纂当初、朱熹自身も「今細かに之を思へば、来教の規模の善なるに若かず」と説いていたように、『小学』内篇に相当する古の小学に関する収集には優れていたことと通じるであろう。ただ、朱熹が更に望むような、嘉言・善行に収めるべき小学の実効が窺えるような「古今の故事」の収集は、不十分だったようである。それゆえに、朱熹は「古今の故事」を大幅に増補した。

また、『戒子通録』の抜粹収録の仕方から見た場合、劉清之の採録の仕方は、原典そのままに抜粹収録することが多いようである。これを朱熹『小学』と比較するならば、『小学』に収める六〇章は、劉清之『戒子通録』と話題が共通する。そのうちの二五章は、朱熹『小学』の方が要略して収録し、残りほぼ類似した抜粹文である。例えば、『戒子通録』巻六13章に見える胡文定の語は、その子に与えた書簡からの抜粹であるが、劉清之が「十二事」としてまとめるのに対し、朱熹『小学』嘉言13章で採録したのは一事のみである。あるいは『戒子通録』巻八18章に収める「崔元暉母」は『唐書』より話題の全文を抜粹収録するのに対し、朱熹『小学』は後半部分の『論語』の引用等を省略している。朱熹『小学』の中には、嘉言10章23章など長文の言行も収録しているが、小学書として提示するには、語中における経書の引用等、不用だと判断する箇所を省略して、読者の「心に入り易く、最も有益為る」ような適切さを心がけたのであろう。そのため小学書編纂に際しては、劉清之の原典そのままに話題の全文を抜粹する姿勢を朱熹は望まなかったと見える。小学書の編纂方針を示しあった書簡「答劉子澄」

七には、「但だ須らく約取にすべくして、太だ泛くせ令むる勿ければ、乃ち佳し」と、内容を「約取」にすべきこと求め、淳熙一二年七月に改修した自身の編纂については「旧に比すれば儘く簡易・条暢に覺ゆ」と述べている。このような朱熹の姿勢からみると、劉清之の抜粹収録の仕方は冗長な感じを与えたであろう。あるいは朱熹が「劉子澄の輩は、便ち是れ務めて博雜を求むるを以て其の心を陷溺す」（『朱子語類』卷一九八）と説く背景は、このような差異に因るのかもしれない。いずれにしても、「約取」にすべきことを求め、自身の編纂を「簡易・条暢」と自述していること、および『戒子通録』の抜粹収録の仕方からみると、劉清之の小学書は現行本朱熹『小学』よりも一章あたりの抜粹は長文であったことが推測される。このことより、劉清之の小学書編纂に対する姿勢は、古今の小学に関する話題を博く求めて、概ね原典そのままに抜粹収録しようとしたと考え得る。そのような劉清之小学書に対し、朱熹は改修を加えることになる。

五

劉清之小学書（鄂州本）に対して、朱熹が改修を加えたことは、小学に対する考え方に基づいている。小学は、大学に対する学問の呼称であり、古法においては八歳から十四歳までの童子が学ぶべき灑掃應對などの学問をいう。小学と大学の学問の差異は、「小学は是れ事、君に事へ・父に事へ・兄に事へ・友に処する等の事の如きは、只だ是れ他に教へて此の規矩に依りて做し去らしむ。大学は是れ此の事の

理を發明す」（『朱子語類』卷七）と、小学ではある一定の状況・対象に応じた「規矩」に従って事を行い、大学ではなぜそうすべきであるか、その事の理を学び、それによつてあらゆる状況・対象に対応できるようにすることになる。そして、その小学・大学を貫く工夫として、「敬」が重視される。

やはり私が理解するところ、「敬」一字は、聖学の始終を成す方法である。小学を学ぶ者は、この「敬」に由らなければ、本源を涵養し、灑掃・応対・進退の節と六芸の教に謹めることはできない。大学を学ぶ者も、この「敬」に由らなければ、聰明を伸張し德行に進み事業を修め、明德・新民の功を収めることはできない。

蓋吾聞之、敬之一字、聖學之所以成始而成終者也。爲小學者、不由乎此、固無以涵養本原、而謹夫灑掃應對進退之節與夫六藝之教。爲大學者、不由乎此、亦無以開發聰明進德修業、而致夫明德新民之功也。

（『大学或問』上）

「敬」は小学・大学を貫く工夫であり、小学は「敬」の着手点、大学は「敬」の到達点ともいえる。聖人であつてもただ「敬」の工夫があるのみで、「敬は是れ徹上徹下の工夫。聖人の田地に做り得と雖も、也た只だ這の敬を放下し得ず。堯舜の如きも、也た終始は是れ一箇の敬のみ」（『朱子語類』卷七）とも説いている。大学は、小学によつて培われた成果の上に立脚してこそ効果が得られるのである。逆に言えば、小学の工夫無くして、ただ「格物致知」のみを云々しても実効は期待できない。

近頃、「敬」一字は、真に聖学の始終の要訣であることを理解した。従来の議論では、「まず知を致してから、その後にこの敬に力を注ぐ」と謂われていたが、おそらく妥当ではないだろう。やは

り古人が小学に由つて、大学に進んだことは、灑掃・応対・進退の間について、持守すること堅定、涵養すること純熟なること、まことに久しいものである。それだからこそ大学での次序は、ただ小学で培った工夫に因つて、格物致知を最初とするのである。

近來覺得敬之一字、真聖學始終之要、向來之論、謂必先致其知、然後有以用力於此、疑若未安。蓋古人由小學、而進於大學、其於灑掃應對進退之間、持守堅定、涵養純熟、固已久矣。是以大學之序、特因小學已成之功、而以格物致知爲始。

（『朱子文集』卷四二・答胡広仲一）

大学での学問、すなわち格物致知に進む前には、小学で培った工夫が熟していることが求められる。その小学の工夫とは、灑掃・応対・進退などの日常行為の習慣化であり、これら日々の生活で規範に沿つて反復して「事」を行うことによつて、倫理・価値を習得していくのである。例えば、「孝」とは毎朝早朝に父母に挨拶をすることであると教えることではない。毎朝早朝に父母に挨拶を行い、その反復習慣化の中に「孝」を自ら心に感ずることである。それ故に、小学の「事」とは、ただ規範を覚え、形式的に行つていれば良いというものではない。

古人の小学は、（規範に沿つて）事を行うことを教え、自分自身でその心を涵養し、知らない間に良くなつていく。成長するに及んで、事物に通達させたならば、よくなし得ないことはない。

古人小學教之以事、便自養得他心、不知不覺自好了。到得漸長、漸更歷通達事物、將無所不能。

（『朱子語類』卷七九）

事の反復習慣化は、心を養い得るものであり、そうすることによつて知らず知らずのうちに孝悌などを

心に得ていくのである。そうでなければ、「古人は只だ心の上に去りて理解し、……今人は只だ事の上に去りて理解す」（『朱子語類』巻七二）と批判されるように、「事」をなぞるだけでは何も得るものがない。やはり望むべきは、「事」の着実な習慣化と、それによって孝悌などを心に得ることである。その蓄積の上に大学へ進んだならば、無限に個別化する外界事象に対して、適切な対応を採ることが可能になる。「敬」は、その小学・大学を貫く工夫である。

しかし、ここに問題が生じる。童子の頃に「事」を反復習慣化し、それによって得られた成果を元に、成長してから大学に進むのであれば、童子の際に小学に従事しなかった者や、また朱熹が批判するような形式的に「事」を行うだけの「熟」していない者は、もはや聖賢の学に着手できないのであろうか。『大学或問』には、以下のように記す。

質問。……もし年齢が長じてしまつて、次序に沿つた学問に及ばなかった人が、小学に従事しようとしたならば、おそらくは矛盾して耐えられないという憂いや勤苦しても成就し難いという憂いを免れないでしょう。また、ただ大学にだけ従事しようとしたならば、おそらくは次序を失い本が無く、通達することができないでしょう。どうすれば良いでしょうか。

答え。過ぎ去つた歲月は、もとより追いつくことはできない。しかし工夫の次第条目については、どうして補えないことがあるうか。……不幸にも時期を過ぎ去つてから学ぶ人は、誠実に「敬」に力を注ぎ、大学に進みながら、兼ねて小学を補うことを厭わなければ、その学問は、本が無くして通達できないと憂えることはない。

曰、……若其年之既長、而不及乎此者、欲反從事於小學、則恐其不免於扞格不勝勤苦難成之患。欲直從事於大學、則又恐其失序無本、而不能以自達也、則如之何。曰、是其歲月之已逝者、則固不可得而復追矣。若其工夫之次第條目、則豈遂不可得而復補耶。……不幸過時而後學者、誠能用力於此、以進乎大、而不害兼補乎其小、則其所以進者、將不患於無本、而不能以自達矣。

「敬」に基づくならば、小学を闕いていたとしても、後に小学・大学を共に学ぶことは可能である。「(大學・小学は)相ひ兼ねて看るも亦た妨げず」(『朱子語類』卷七22)と、小学と大学を共に学ぶことを朱熹は否定しない。無論、そのためには「其の功を百倍するに非ざれば、以て之を致すに足らず」(『大學或問』上)と、多大な努力が要求されるのは言うまでもない。

この問題は、小学書の編纂にも関係してくる。もし童子やその父師に日常的に習慣化して行うべき「事」を示すだけであれば、当初劉清之が編纂していたような「法制の語」だけで良かったであろう。あるいは、現在(宋)にも通じる規範としての「事」を提示するのであれば、「嘉言」だけでも良い。しかし、朱熹は稽古・嘉言・善行に亘る「古今の故事」を大幅に増補した。それは、これから小学を踏み行う童子のためであると共に、時機を逸したり、小学を違えたりした成人に対して、大学と共に学んでも効果を得られるようにするためであろう。つまり、『小学』は童子が習慣化すべき行動規範を提示するとともに、時機を過ぎた者でも「敬」に務めることができるようにも想定して編纂した書だと考え得るということである。

劉清之小学書が、小学に関する「法制の語」を博く集め、概ね原典そのままに抜粋収録した書で

あつたと想定し得るのと比較すれば、朱熹からすれば小学書を童子の行うべき規範として提示するだけでは不十分であつたと考える。それゆえ、朱熹は劉清之小学書を改修して、大幅に古今の故事を増補し、また一章あたりの言行を「約取」にして読者の「心に入り易く、最も有益為る」ようにした。また小学書編纂の傾向より見るならば、朱熹『小学』が劉清之小学書を改修しているにしても、編纂に対する両者の見解は異なるものであり、やはり朱熹『小学』は朱熹の編纂書であろう。

結

大学を提唱することにより生れた弊害は、小学での工夫無くして格物致知にのみ関心を向けることである。「敬」は小学・大学を貫く工夫であり、身近な状況・対象に応じた「事」を習慣化することによって、心に培った成果を用いてこそ、初めて格物致知に実効が得られる。しかし、だからといって、ただ小学の重要性を説くだけでは済まされない問題が新たに生じてきた。小学による工夫を行わずに成長してしまった者や、培った成果の無い者は、もはや聖賢の学に着手することはできないのか、との問題である。朱熹『小学』は一つには大学に着手する以前の童子に、着実に小学を踏み行わせることであり、いま一つとしては時機を失した者や培った成果の無い者でも、学ぶことができるようにしたことである。それに対し、劉清之小学書（鄂州本）は、「法制の語」のような小学に関する言行を博く集め、概ね原典そのままに抜粋収録した書であつたと想定し得る。この劉清之小学書に対して、朱熹は「心

に入り易く」するような「古今の故事」を増補し、一つ的话题を「約取」にした。それは、小学・大学を貫く工夫である「敬」を想定しての編纂改修であつたと言える。

〔注〕

(1) 『朱子語類』卷七11に、「敬是徹上徹下工夫。雖做得聖人田地、也只放下這敬不得。如堯舜、也終始是一箇敬。」とある。なお、「敬」と大学・小学に関する論考には、垣内景子「朱熹の「敬」についての一考察」日本中国学会報第四十七集（一九九五年一〇月）がある。

(2) 『四庫全書簡明目錄標柱』（卷九・小学集註六卷）には、「舊本題宋朱熹編。以朱子集中癸卯與劉子澄書考之、實子澄之所類次。猶通鑑綱目出趙師淵手也。」とある。その他、日本での『小学』編纂の見解も、劉清之に重きを置く。例えば、宇野精一『小学』（新釈漢文大系）（明治書院、一九六五年九月）には、「『小学』内外篇六卷は、南宋の大儒朱熹が、孝宗の淳熙十四年、彼が五十八歳の頃に著わしたものとされているが、実は友人の劉清之の原稿に朱子が手を加えて撰定したものである。」とある。

(3) 『朱子文集』続集卷二・答蔡季通「小學冊子向時攜去、今告早附來、添註此數項、便可上納付匠家也。子澄寄得鄂州本來、今往一本、并唐鑑如喻遺上。」同「小學誤字再納去數紙、封面只作武夷精舍小學之書可也。」

(4) 劉清之の生卒年については、複数の見解がある。その主なものは、

(一) 一一三四生・一一九〇卒：『宋人伝記資料索引』『中国歴代人名大辞典』等、近年多く採られる。

(二) 一一三九生・一一八九卒：田中謙二「朱門弟子師事年攷」、陳榮捷『朱子門人』等。

(三) 一一三九生・一一九五卒：姜亮夫『歴代人物年里碑傳綜表』等。

の三説であり、方彦寿『朱熹書院与門人考』のように生卒年を明示しない書もある。結論だけを述べれば、三説はどれも誤りであり、正しくは紹興三年（一一三三）生・淳熙十六年（一一八九）卒である。劉清之の卒年に關しては、田中謙二「朱門弟子師事年攷」（『田中謙二著作集』第三卷、汲古書院、二〇〇一年二月所収 六七―七八頁）に的確な考証がある。ただ田中はその卒年を『宋元学案』卷九七・慶元党案年表に基づいているが、『宋名臣言行錄』外集卷一四・劉清之に「寧宗（光宗の誤り）嗣位、越月起知袁州、而已病矣。淳熙十六年九月歿、享年五十七」ともある。生年はこれよりすれば、紹興三年（一一三三）であり、前後の状況からもこれに従って良いと考える。また、劉清之に關しては、この生卒年を始め、不明なことが多いため、推測し得る限りの事跡については年表として後附した。

（5）『朱子語類』卷一〇一・二「劉子澄編續近思錄、取程門諸公之說。某看來、其間好處固多、但終不及程子、難於附入。」（原注）璘。必大錄云、程門諸先生親從二程子、何故看他不透。子澄編近思續錄、某勸他不必要作、蓋接續二程意思不得。」

（6）東景南（『朱熹年譜長編』二四九頁）は、劉清之が応じようとした博学宏詞科を紹興三〇年（一一六〇）の時とするが、それは紹興二七年に袁州宜春県主簿の任官と父の死去があつたと推測するからである。しかし、羅願「劉豊国行録」（『羅鄂州小集』卷四）に従えば、父劉餘の死は紹興二九年であり、合致しない。

（7）朱熹が教育に意を注ぐことは多く指摘があるので再論しないが、劉清之も小学書編纂前後より、講学活動に力を注いでいたことが、『宋史』本伝や地志の類に見える。例えば、知衡州（淳熙一三年四月～淳熙一四年一二月）時期には臨蒸精舍を、帰郷した後は槐陰精舍を築いて講学に努めていることや、『大清一統志』卷二八三・永州府には「讀書堂」を、『淵鑑類函』卷二〇一には「朱陵道院」を作ったこと

等が見える。

(8) 「答劉子澄」七について、陳来（『朱子書信編年考証』二〇四頁）は疑問を呈しつつ、淳熙九年七月の書簡であると考証する。書簡中に見える「去冬奏対」を「昨年の冬の奏対」と解釈すれば、朱熹が淳熙年間に奏対したのは八年（一一八一）冬の一度だけであるため、淳熙九年の書簡となる。しかし、東景南（『年譜長編』七七四頁）は、同書簡中にみえる「武夷精舍雜詠」が一〇年作であることを重視し、「去冬奏対」は「過去の冬の奏対」の意であると解釈して、淳熙一〇年の書簡とする。朱熹・劉清之の小学に関するやりとりからも、淳熙一〇年の書簡が相応しいと考える。

(9) 『朱子文集』卷三五・答劉子澄九「小学書却非此比、幸早成之。」『朱子文集』卷三五・答劉子澄十「小学書却與此殊科、只用數日功夫便可辦、幸早成之、便中遣寄也。」

(10) 『朱子語類』卷一〇五20に、「問小學實明倫篇、何以無朋友一丈條。曰、當時是衆編類來、偶無此爾。」とあることを重視すれば、小学書の編纂には複数人の手を経ていることになる。その一人が蔡元定であり、『朱子文集』続集卷二・答蔡季通に、「小學冊子向時携去、今告早附來、添註此數項、便可上納付匠家也。」とある。また淳熙一三年秋に劉清之へ送った書簡「与劉子澄」十四には、「近得韓丈書云、如鄧攸縛子於樹之屬、似涉已甚、恐此等處誠可削也。」と、『小学』に関する意見を受けていたことが見える。

(11) 劉清之が程子の言行を収録することを避けたのは、あるいは程子に対する評価が低かったからと考えられるかもしれない。しかし、後に劉清之の自身、道学者として弾劾され、知衡州を任期半ばにして退くことになる上に、『朱子語類』卷一三九42には、「劉子澄言、本朝只有四篇文字好。太極圖・西銘・易傳序・春秋傳序。」と、宋儒の書で読むべき一書に『程子易伝』を挙げている。また『宋史』本伝には、

「高安李好古以族人以財爲訟、見清之豫章。清之爲說訟・家人二卦、好古惕然、遽舍所訟、市程氏易以歸、卒爲善士。」と、門人の李師愈（字、好古）に示した易解釈が、程子に則っていたであろうことが見える。やはり、劉清之が程子を評価していなかったということはなく、程子への言及を避けたのであれば、それは当時の情勢に対する配慮からであろう。

- (12) 劉清之が原典そのままに抜粹するが故に、家誠や家訓などを収めた『戒子通録』に価値を見出すこともできること、沈時蓉「論劉清之和他的《戒子通録》」四川師範大學學報（社会科学版）第二二卷第二期（一九九五年四月）に言及がある。

- (13) 朱熹『小学』と劉清之『戒子通録』を比較することに対して、その有効性に疑問はあるが、朱熹が劉清之の集めた言行を要略したと見えることも事実である。例えば『戒子通録』卷三二「曾子告子言」には、『大戴礼記』曾子疾病、『說苑』敬慎より曾子が子を戒めた語を三章として抜粹収録している。朱熹『小学』は、その三章のうち第二・第三章を明倫103章・104章として収める。『大戴礼記』『說苑』の抜粹の仕方及び配列順から、明倫の二章は劉清之が抜粹収録した三章を、朱熹が第一章だけを削ったと考えるのが妥当であろう。

- (14) 『大学或問』上「敬者、一心之主宰、而萬事之本根也。知其所以用力之方、則知小學之不能無賴於此以爲始。知小學之賴此以始、則夫大學之不能無賴乎此以爲終者、可以一以貫之、而無疑矣。」

- (15) 『大学章句』序「而此篇者、則因小學之成功、以著大學之明法、外有以極其規模之大、而内有以盡其節目之詳者也。」

「本稿は、独立行政法人 日本学術振興会科学研究費補助金による研究「詩人としての朱熹に関する基礎的研究——絶句表現の諸相を中心として——」（基盤研究C、平成一六年度）の成果の一部である。」

【劉清之年譜（一一三三—一一八九）】

紹興三年（一一三三・一歳）誕生。

実母は早くに亡くなり、孝養を尽せない。兄劉靖之から学業を授かる。

紹興二年（一一五四・二歳）兄劉靖之、進士及第。

紹興二七年（一一五七・二五歳）進士及第。

紹興二九年（一一五九・二七歳）二月甲寅、父劉齡死去（年六十一）。〔『羅鄂州小集』卷四〕

これより以前に袁州宜春県主簿に任じられていたが、父の喪に服す。

隆興元年（一一六三・三一歳）博学宏詞科を受けようとして、朱熹にまみえる。

乾道元年（一一六五・三三歳）おそらく、この頃に嚴州建德県主簿に赴任。その際に呂祖謙（在婺州）と面識を持ったか。〔劉清之「祭文（呂祖謙）」〕

乾道四年（一一六八・三六歳）秋、建德県主簿の任期を終え、朱熹（在崇安）を訪問、数日間語り合う。

〔朱熹「劉氏墨莊記」〕

乾道七年（一一七一・三九歳）おそらく、筠州高安県丞として、この年の飢饉に治績あり。（※1）

乾道八年（一一七二・四〇歳）八月、陸九齡と共に呂祖謙（在婺源）を訪問。〔『東萊集』附録卷一・年譜〕

乾道九年（一一七三・四一歳）二月、朱熹「劉氏墨莊記」成る。

淳熙元年（一一七四・四二歳）正月、呂祖謙（在婺源）を訪問。〔『東萊集』附録卷一・年譜〕

淳熙二年（一一七五・四三歳）五月、鵝湖の会に参列。

淳熙三年（一一七六・四四歳）二月、朝廷に参内して奏事を行う。（※2）

六月三日、義母裴氏死去（年八十）。八月、父劉焄の側らに葬る。「楊万里「通直劉君裴夫人墓誌銘」」

八月、鄂州通判に任じられる。「『資治通鑑後編』卷一二四・淳熙三年八月」

淳熙五年（一一七八・四六歳）正月丙辰、従兄劉龜年死去（卒年未詳）。

四月二四日、兄劉靖之死去（年五十一）。七月頃、廬陵の先墓の側に葬る。「張南軒「教授劉君墓誌銘」」

淳熙六年（一一七九・四七歳）劉龜年の息子劉孟容に書状を託し、朱熹に劉龜年の墓表を依頼する。

秋、朱熹（在南康）を訪問。七月立秋日、朱熹や同僚士友等と外遊。唱酬詩あり。

淳熙七年（一一八〇・四八歳）二月、朱熹が劉靖之の伝を作る。「『朱子文集』卷九八・劉子和伝」

三月二日、張栻死去（年四十八）。

淳熙八年（一一八一・四九歳）閏三月頃、朱熹（在南康）を訪問。四月三日、任期を終えた朱熹の帰郷に

同行。四月六日、濂溪先生書堂の遺像を拝し、劉清之は諸生のために太極図の解説を朱熹に要請。四

月七日、朱熹と別れる。

七月二九日、呂祖謙死去（年四十五）。八月、祭文を著す。「『東萊集』附録卷二・祭文」

九月三日、朱熹が劉清之『曾子』の跋文を書く。「『朱子文集』卷八一・書劉子澄所編曾子後」

淳熙九年（一一八二・五〇歳）夏、おそらく鄂州通判として任地へ向う。

〔彭龜年「別劉寺簿子澄赴岳州倅「壬寅夏」」詩〕

淳熙一一年（一一八四・五二歳）正月十四日、朱子が「鄂州社稷壇記」を作る。また「答社壇説」あり。

〔文集卷七九、六八〕

秋冬頃、おそらく小学書（鄂州本）と『羅鄂州小集』を刊行。

淳熙一二年（一一八五・五三歳）劉清之小学書（鄂州本）は朱熹の手許に。朱熹は七月までに改修。

淳熙一三年（一一八六・五四歳）四月、知衡州として赴任（『衡州府志』）。臨蒸精舎を築いて講学に励む。

淳熙一四年（一一八七・五五歳）三月、朱熹が「小学書題」を著す。

一二月二七日、華州雲台觀を主管。（『宋会要輯稿』第一〇一冊・職官七二之四九）廬陵に帰郷。

淳熙一五年（一一八八・五六歳）槐陰精舎を築き、講学に努める。

淳熙一六年（一一八九・五七歳）二月、光宗即位。

三月、知袁州に任じられるが、病いに罹る。

九月、死去（年五十七）。「『宋名臣言行録』外集卷一四、『資治通鑑後編』卷一二七・淳熙一六年九月」

※1 『宋史』本伝を始め、多くは「万安県丞」とするが、『宋名臣言行録』に「高安県丞」とあるのに、従うのが正しい。またその在任期間は不明であるが、筠州の飢饉より本年と推定。

※2 『続資治通鑑』は「淳熙二年五月」とするが、前後の動向より合致しない。東景南『朱熹年譜長編』（五五〇頁）に指摘がある。